

空  
の  
海

ホ  
オ  
ジ  
ロ  
ザ  
メ  
と

籐  
真  
千  
歳



——水は冷たいのに、海の中はどこか温かくて。

ゆっくり沈んでいく身体は大きな手になった海の水に包まれて。

赤ん坊の頃に母親に抱きかかえられたときのようで。

遠ざかっていく水面が真夏の空のように青くて。

心を海の外に置いてきてしまったかのように。

このまま息が止まってしまふことに何の不安も感じない。

大人たちが慌てて海に飛び込み必死に僕を捜すのを。

物言わぬ珊瑚の欠片になってしまったように。

沈みながら、ただぼうつと見つめていた——。

海まで沸騰しそうな夏だった。



道々は陽炎に溶け、灼けたアスファルトは犬猫ですら素足で歩くのを拒み、雀や燕すら姿を消した。凶器と化した日差しは瞼越しでも目を焼き、肌は爛れたように体内の水分を無駄に垂れ流す。夜は夜で真綿のような質量を持った空気がまとわりついて離れない。人々は死に絶えたように屋内にこもり、天気予報は傷物のCDのように繰り返し氣象観測史上類を見ない猛暑であると繰り返し、湿った新聞の社説は根拠の希薄な温暖化現象の危機が迫ったと訴える。

本州でも南の果てにあるこの地方では、気を違えた太陽の八つ当たりは一際激しかった。よく人間が生き残ったものだと思った。まして、ここは海辺である。祖母の家からは少々曲がりくねった無舗装の土道を二百メートルほども下れば砂浜にた

どりに着く。どんよりと湿った海風はいっただって満員御礼だ。小学生の時分に朝八時半の埼京線に乗った折りだって今年のここの夏ほど不快ではなかった。

正直な話、真面目に暑さだけで死ぬんじゃないかと思った。

しかしそれも先月までの話だ。喉元を過ぎたからと言って照れ笑いしながら角度を下げた太陽を許せるわけではないが、やっと平年並に落ち着いた気温と爽やかになった海風に身を委ねていると、今さら睨んでやる気も起きなかった。

「……どうでもいいし」

首から下は浅黄に褪せた畳の上で大の字になったまま、庇の陰に隠れて体温に比べれば幾分ひんやりとした縁側の床板に頭を預けながら悠理は呟いた。そのまま顎を上げて庇の向こうの青い空を眺めると、空がゆらゆらとまるで水面のように揺らいでいるのが見える。その下をハゼの群れが一糸乱れぬ隊列で泳ぎ、エイが優雅に舞い、タイがのんびりと通り過ぎた。

もちろん、本当に魚たちが空を泳いでいるはずもない。これは幻なのだ。五歳のとき、事故に遭い海中で死に瀕して以来、悠理には空がまるで海の底から水面を見

上げたように見えるようになった。医者へ行っても、幼児期にはよくあることで遅くても中学校に上がる頃までには治ると言われ、親には絶対他人にそのことを言うなど口止めされたが、十七になった今でもはつきりと空の海や魚たちの姿が見える。

群れをはぐれた一匹の小魚が漂ってきて悠理の顔の前で止まった。悠理がふっと息を吹きかけると、首を傾げたようにくるくると回った。手で追い払おうかとも思ったが、幻を相手にするのも馬鹿馬鹿しくてそのまま放っておいた。だがしばらくすると小魚は不意に身体を翻して群れへ戻っていった。

理由はすぐにわかった。遠くからマフラーを外した原付の安っぽい音と、無理にアンプを通して音割れの悲鳴を上げるカーステレオのメタルが聞こえてきたからだ。それは次第に悠理が腕で耳を覆うほどの大音響になる。

玄関から走り出て怒鳴り散らしたい衝動に駆られたが、眉間に皺を寄せて耐えた。ほんの少し我慢すればすむこと。そう、どうだっていい。

都会の人間はよく思い違いをしているが、田舎だからといったのんびりしている連中ばかりではない。不良もいるし、暴走族だっている。都会の不良に対する劣等

感があり人目も少ない分、乱行ぶりは度を超しているとも言える。

悠理に言わせれば、この不良は特に質が悪かった。ひよろつちよいリーダー格の少年の祖父は所轄の警察署長、金魚の糞みたいな金髪は警部補の息子だ。万引きだろうが器物破損だろうが警察に訴えても何もしてくれないし、地元の間人もすっかり諦めていた。

耳障りにもほどがある無機質で自分勝手な祭り囃子が海の声よりも小さくなった頃、やっと悠理は耳から腕を放してまた大の字に戻った。広い田舎だ。メタルは丘の向こうへ遠ざかっていく。

つい、そのまま崖の上から天国にでもダイブしてくれと願ってしまった。



悠理がここへ来てから二ヶ月半になる。六月の末までは都内の進学高校に通う、周囲の友人たちが呆れるほどお人好しなことを除けばごく普通の高校生だったが、

ある事件をきっかけに追い出されるようにして田舎の祖母の家に来てきた。

四月のクラス替えで、ある有名な女子生徒が同じクラスになった。そこそこ美人であったのだが、問題があった。彼女は被害妄想が極端に強く、思いあまつて自己共に傷つけては、教室中を巻き込むような騒ぎを度々起こしていた。それゆえクラスメイトも教師も関わりたがらず、まるで腫れ物を扱うように近寄られれば過剰なほど気を使い、離ればほつとして胸をなで下ろしていた。また、彼女にはもうひとつ悪い癖があった。決めた人間に酷く依存するのだ。それは担任であったり、友人であったりした。そしてその年はたまたま悠理がその依存の対象に選ばれてしまった。

春に席が隣り合ったことがきっかけだった。いつもおどおどしていて、物音がすれば心臓が止まったのではないかと思うほど驚く。そのくせよくぼうつとしていて教師の指示を聞き逃すことが多い。心と同様に身体も弱いのか、ちゃんと登校はするのになびたび保健室へ行って授業を休む。そんな彼女を、悠理は放つてはおけなかった。下心などまったくなかった。それほど自惚れてはいない。ただ自覚するほ

どに悠理は人が良すぎたし、そんな自分が嫌いではなかった。誰もが鼻をつまむ彼女を助けることは、悠理の矜持を満たすに足りた。

教室が変わった直後でクラスメイトたちがまだ落ち着かない頃から、怯えさせないように静な声で積極的に話しかけた。平常授業が始まってからも毎朝「おはよう」の一声を欠かさなかったし、移動教室のときは一人寂しそうな彼女を連れ添った。彼女が休んだ授業は特に細かく教師の余談までノートに取って後で彼女に渡した。グループ分けて彼女が余れば他のメンバーが眉をひそめるのも気にせず呼び込んだ。

初めの頃はそれでよかった。この打ち捨てられた子猫のような少女を可愛がることで悠理は決して少なくない満足感を得られた。だが彼女の存在は悠理の予想を遙かに超えて重荷になっていった。次第に増長し本性を明らかにした彼女は、どこへ行くにも悠理が同行することを望み、休憩時間は他人といるとこれ見よがしにふくれ面になり、授業のグループが分かれたときは教室の真ん中でぼろぼろと涙を流した。



そんな彼女との間に悠理は少しづつ線を引くようになったのだが、彼女はその態度をどう勘違いしたのか「皆屋君は素直じゃないから、興味のある人ほどクールになるよね」などと勝手なことを周囲に言いふらすようになった。彼女の甘えと増長は止まるところを知らず、さすがの悠理も呆れ果てて最終的にはぼ無視を決め込むようになった。

何が決定的だったのかわからないが、初夏の頃、ついに彼女の無遠慮な信頼は一方的な失望と悪意に裏返った。ある日の放課後、彼女は乱れた制服と破れたブラウスのあられもない格好で職員室に駆け込んだ。そして悠理に脅され乱暴されると泣き叫んだのだ。

事は学校内では収まらず、悠理は警察に事情聴取まで受けた。

一週間後、彼女は事件は自作自演だったと担任に告白した。それで教師たちは一段落だったのだが、学校側はもともと事件を大きくしないために関係者に口止めをしていたため、生徒や近隣に事件の経緯について説明することもなく、ただ学校で起きたレイプ未遂事件の噂と悠理の名前だけがそこに残った。

街でも、学校でも。悠理は白い目で見られ、後ろ指を指された。靴箱や机には心ない嫌がらせが絶えなかったし、家の塀にまでカラスプレーで中傷を書かれた。

両親も見えていられなかったのかもしれない。夏休みが直前に迫った六月の末、二人は悠理を休学させ、祖母の家に行かせることを決めた。



大の字で海風に身体を任せうとうととしているうちに、そんなことを思い出していた。

時計は午後の二時過ぎを指している。

やることはない。祖母は裏の小さな畑の手入れや近所の蜜柑畑の手伝いに出かけるが、悠理にはそれらはおろか家事手伝いのひとつも強制することはなかった。せいでい掃除のときに邪魔だから隣の部屋や縁側に移動させるぐらいだ。不快な暑さにまみれ無為で怠惰な時間を過ごすだけの毎日だが、悠理はそれを自覚しているの

だからある意味この終わりの決まっていけない長い休暇を満喫しているとさえなくもない。だから部屋の隅で鳴り響いた田舎の雰囲気に似合わないポップスは、悠理の中のリアリティを否応なしに甦らせ、不快なことこの上なかった。

しかしそれはさっきの馬鹿共のメタルとは似て意味が違う。嫌な歯医者に行くときのような倦怠感を背負いつつ、悠理はやむを得ず起きあがり膝立ちになって部屋の角のコンセントに刺さっている充電器から携帯電話を抜いてボタンを押した。

『遅え！ 発信音何回聞いたと思ってるんだ！ 二十六回だぞ、二十六回！ 短い着メロならアンコール二回分だ！』

いちいち数えているとは意外にマメな奴だ。それとも当てずっぽうか。なんとなく後者な気がした。悠理は「あー」と呟いてゆっくり伸びをし、それから首を左右に振って脊椎を鳴らしてから「悪い」と一言だけ返した。

その後はしばらく電話に出るのが遅かったと言うだけでたらたらと無意味な説教が左の耳から右の耳へ流れていった。面倒には思うが悪い気はしない。中学以来の腐れ縁だが、彼は何か手詰まるとすぐに勢いに任せるタイプなので珍しいことでは

ない。つまり、彼なりに自分を氣遣つて空回りしているのだろうと悠理は理解した。聞き流しつつ、なんとなく上の方を視線が彷徨う。縁側を仕切る障子の上に小さな神棚があり、そこで目の放浪は終わった。

この古い家には仏壇と普通の神棚の他にもうひとつ、小さな神棚が海を背にして掲げられている。大人の手の平ほどの赤い鳥居が珍しくて、幼い頃はよく父親に肩車してもらつて覗き込んだ。

ふと、その神棚の鳥居の下に昔はなかったものを見つけて手を伸ばして取った。親指を折り曲げたほどの大きさの白い何かだった。三角形の形をしていて、底辺のところ穴を開けて紐を通していた。手触りは石のような、枯れた珊瑚のような。

『……だよ。おい、聞いているのか？』

不意に意識を引き戻され、「ああ」と返事をした。

『もう二学期が始まって二週間だろ。夏休み入れれば二ヶ月半もそっちにいるんだ。もういいだろ、戻って来いよ。出席日数も足りなくなるぜ、一緒に大学行くんだろ？』

悠理が気のない返事を返すと、スピーカーの向こうで彼が溜息をついた。

『……………あ。の。な。実。は……………の……………が……………り……………って……………』

突然、音声が途切れ途切れになって、最後にぶつりと音を残して通話は切れてしまった。見ると電波強度のアンテナ表示が圏外になっていた。思わず首を傾げる。

田舎とはいえこの家で携帯の通話が切れたことは今までなかったのに。

故障か、あるいは今年も台風が来たし、何か事故があったのかもしれない。そう思っただけで携帯をまた充電器に戻した。

電話のせいで、無関係のように思っていた東京の時間とリンクしてしまったような気がして、見慣れた座敷がなんとなく居心地が悪くなっていた。縁側に出て外を眺めると、海が木々の向こうの砂浜から空との境界まで青く塗りつぶしているのが見える。寝癖のついた頭を適当に撫でつけながら玄関の方へ向かった。

「おや、気が早いね」

今帰ってきたらしいほっかむり姿の祖母が、昔に比べると少しだけ曲がってしまった腰の後ろで玄関の戸を閉めようとしていた手を止めた。悠理が怪訝な顔をする

と祖母は口癖の「おやおや」を繰り返した。

「てつきり祭りの出店に行くのかと思っただよ」

そこでやっと近々地元の神社の三昼三夜の祭りがあると、いつだかの夕食のときに祖母が言っていたのを思い出した。

「祭りは明日からだけれど、出店は早めに始めるからね。ゆっちゃんも行ってくるとええよ、今日なら空いとろうよ」

悠理は小学校に上がる前まで祖母と一緒に住んでいたもので、この辺りには幼なじみは何人かいるのだが、今さら顔を合わせたくなくて避けていた。祖母が「空いている」と強調したのはそんな悠理のことを気遣ったからだ。

悠理はサンダルを引っかけると首を振って祖母の横を抜け外へ出た。後ろから祖母の「おやおや」という呟きが聞こえた。

無舗装の道を下って防風林を抜けると、田舎には不似合いな真新しい二車線の県道がある。その向こうはすぐ砂浜と海になっていて、日差しに焼かれて汗の浮いた肌を潮風が撫でる。一日に数えるほどしか車の通らないその道路を渡って二十歩も

歩くと、所々錆の浮いた屋根とベンチ付きのバスの停留所があった。

悠理はベンチの上に転がるようにして仰向けに寝転んだ。木製のベンチは所々ペ  
ンキが剥げ少々ささくれだっているものの、屋根のおかげで刃物じみた日の光を浴  
びることがなく、海風が心地よいこの場所を悠理は気に入っていた。一日に四本し  
かないバスにここから乗る客は週で見ても片手の指の数もないだろう。気兼ねす  
ることはなかった。ただ、寝過ごしたときに夕方の傾いた太陽に照らされて汗をか  
き、不快な目覚めをすることだけが不満だった。

目をつぶると砂浜に寄せる波の音と海鳥の声が頭の中に染み込む。思い出してし  
まった東京での出来事も、潮騒とともにだんだんと遠くなっていっていった。



目が覚めた理由の半分はきつと寝心地が良すぎたからだ。意識がおぼろに甦り始  
めたとき、頭が枕よりも柔らかい何かで支えられていることに気がついた。ゆつく

りと瞼を開くと、目の前に左半分を色づいた夕日に照らされた見知らぬ少女の顔が息がかかるほど近くにあった。

心中仰天し狼狽え、全身が冷や水を被せられたように硬直した。息も殺してただその楚々と瞼を落とした少女の顔を見入る。頭の中は子供の頃に見た鼠を猫が追いかけて回すカートゥーンのように騒々しくぐるぐるとミキシングしていて、心臓は胸板を内側からけたたましく叩いていた。

潮騒に隠れるように、小さな寝息が聞こえる。

ここは寝入ったときのままの寂れた停留所のベンチだ。ただ違うのは日の光が橙に色を変え斜めに差していることと、頭を少女に膝ひざまくら枕まくらされていること――。

ふと、少女の頭が小さく揺れて、寄り添っていた上下の弓反りの睫まつげがゆつくりと離れていった。中から漏れだした臙脂色えんじの瞳が悠理を捕らえると少女は微笑み、

「寝顔があまり可愛いので、食べてしまおうかと思いました」

冗談のつもりなのか、物騒なことを言った。

不意にその顔の半分がピンクの携帯電話に隠れ、裏側のフラッシュライトが眩し



く瞬いた。すぐにピロリンと軽妙な電子音が鳴る。

「寝起き顔、ゲットです」

携帯の画面いっぱい映った裕利の惚けた顔を見せつけて、少女はしたり顔をしていた。魚のストラップがゆらゆらと揺れる。

少女の手を振り払いながら起きあがり、辺りを見渡す。やはりいつもバス停だ。ただ少女の存在だけが悠理の頭をかき乱していた。

「私、覚えていません？」

「お前は？」と問う前に、用意していたように少女が機先を制した。清潔そうな黒のロングボブの髪を鰐つばひら広の帽子の陰で揺らしながらいたずらっぽく笑う。両腕をベンチに立て、少女は悠理を急かすように淡い桃色の二段フリルのミニスカートに包まれた足をぶらぶらさせた。

「松島」という少女の呟くような声が悠理の記憶の音叉を震えさせる。

「……志緒ちゃ」

幼い時分のまま「ちゃん」付けて呼びそうになって慌てて口を閉じた。

——松島志緒<sup>しお</sup>。幼なじみの一人だ。近所ではただ一人の同年だったので、よく一緒に遊んだのを思い出した。

だからといって特にこれと言った感情は生まれなかった。それよりも意識のないうちに馴れ馴れしく膝枕などをされたことに嫌悪感を感じていた。

「どうしてこんなことを？」

志緒は演技っぽくふうと頬を膨らますと、

「だって、私の座るところがなかったんですもの」

「バスを待ってたのか」

「いいえ」

暖簾<sup>のれん</sup>を押すようなやりとりだ。馬鹿にされているように思えてきて、悠理はますます無然として立ち上がった。

腰を上げた刹那、何かポケットから滑り落ちてアスファルトの上で乾いた音を立てた。悠理が振り返るより早く志緒がそれを拾い上げ、一瞬狐に摘まれたような顔をした。

「これ、ずっと持っていたらしたんですね」

志緒が差し出したものは、昼間に神棚で見つけた白い石だった。電話をしていたときにポケットに入れてしまっていたらしい。

もしかすると祖母にとつては大切なものなのかもしれないと思ったが、志緒の手から返してもらうのも何か格好がつかない気がして悠理がそのまま背を向けようとしたとき、志緒が素早く悠理の手を取って引き振り向かせてあつという間に悠理の首に白い石を吊り下げた紐をかけてしまった。

「ダメですよ、大事なものでしょう?」

悠理の鼻先に人差し指を立てて子供を叱るような仕草をする志緒に眉根を寄せて見せて、今度こそ背を向けて歩き出した。

「ねえ! 明日一緒にお祭り行きませんか?」

思わず一瞬足を止めてしまった。幼なじみとはいえ十年ぶりに会ったというのにあまりに馴れ馴れしくて腹が立つ。答えずに道路を渡って防風林の間の道に歩み入った。

「明日のこの時間、ここで待つてますねえ！」  
歩を早める悠理を小馬鹿にするように、目の前をクマノミの番が優雅つがいに通り過ぎ  
ていった。

家に帰ると祖母が玄関の見えるお勝手から悠理に「おかえり」と声をかけ、それ  
から驚いた顔をして手ぬぐいで手を拭きながら悠理のところへやってきた。視線の  
先は悠理が首から提げた白い石だった。神棚から勝手に持ち出したことを咎められ  
ると思ったのだが、悠理が石を返そうとすると皺を寄せて笑って「あんたが持つて  
いなさい」と言った。

「ああそういえば、ゆっちゃんが出かけた後にお友達が来たよ。ええと、なんてい  
ったかねえ、ミヨちゃんだったか、ミキちゃんだったか……いやだ、歳かねえ、最  
近物忘れが。ほら、よく一緒に遊んでいた子の……」

——昼間に誰か来たら、絶対に居留守を使おうと心に決めた。



両親はそうでもないので、遺伝ではないようだ。かといって後天的なものにしては心当たりがない。そう運命づけられたのだと思っていたが、どうせ運命だなんてロマンティックなものならどこかの美人との出会いが約束されていたりした方がありがたみがある。ずっと前向きに自分の長所と考えようと努力してきたが、今となっては冤罪で居残り掃除を指示されたような、損だけ押しつけられたようにしか思えなかった。

悠理は「甘い」。捨て猫を見つけた日の夜は、拾ってこられなかったことが悔しくて朝まで悶々と悩み続けるような、そんなタイプだ。十七年間、ずっとそれを美德だと思つて生きてきた。

誰だつて自分を変えようと思つてもすぐには変われない。東京を追い出された原因の一件、身を切つてまで施した厚意が裏切られ踏みにじられたとき、悠理は自分の中の「優しさ」をすべて消し去つてしまおうと決めた。二度と他人のために心を病まない、思いやらない。自分に内在するそういったもののすべてが憎かった。そ

れがどれだけ自分の人生を狂わせてきたのかと考えると、悔しくてならない。だから今、丸呑みしてしまったウニの針のように胸を内側からちくちくと痛ませるものの存在が許せなかった。

昨日、志緒と別れたのが夕方六時頃。それまではいつものようにだらだらと、何を思うでもなく部屋で過ごしていた。気になりだしたのが祖母が夕飯の仕度を始めた六時半。空の暗さに比例して苛立ちが最高潮を迎えたのが祭り囃子が遠くに聞こえてきた八時過ぎだった。無意味に畳を蹴り、馬鹿馬鹿しいテレビのバラエティに怒りをぶつけるようにリモコンを放り投げると、障子の縁に当たって意外に大きな音を立てて、台所で夕飯の後片付けをしていた祖母が「おやおや」と言うのが聞こえた。

その後はさすがにもう待つのをやめただろうと思ってだんだんと気が楽になった。胃の辺りではまだ何か重いものが沈み溜まっていたが、一方で軽く鼻で笑いたくなるような小さな勝利の愉悅のようなものも感じていた。自分の甘さを吹っ切つてひとつ変わったように思えた。

今時シャワーのない風呂から出たのが十時過ぎ。その頃にはもやもやしたものは身体の垢とともにすっかり流れ落ちていた。ノースリーブにハーフパンツの姿で、星のよく見える縁側の柱に寄りかかり海風で身体を冷ましながら、近頃懐かしく思えてきた歌謡曲のメロディを鼻歌でなぞっていたとき——その微かな地上の星を見つけてしまった。

この家は丘の斜面にあり、昼間なら海はもちろん防風林の向こうの砂浜や県道まで見下ろせる。光は県道の道路脇辺りに見えた。モールスのように意味ありげな明滅をするそれはフィラメントの焦げ付いた照明の光だとは思えない。

その意味するところに思い当たり、悠理の鼻歌は止まった。終わった映画の幕が下りるように、心地よい気分が別な色に塗り替えられていく。認めがたい焦燥とそれに伴う怒りのようなものが沸き起こる。それは誰に対してもものもだったのか。

やがて光が消えてもう点かなくなるとき、悠理の中でも何か切れた。

気がつけば、蹴るようにサンダルを引つけて玄関から飛び出していた。月明かりだけを頼りに石ころが斑まだらに埋まる土道を何度も躓きながら駆け下りた。防風林を

抜け、道路灯もまばらで暗く静まる県道を中央線が無視して斜めに走り渡った。その場所——寂れたバスの停留所まで。

「やっぱり来てくれました」

月と星も微かに、青く沈むバス停に飛び込んだ刹那、真つ白な光が肩で息をする悠理を照らし出した。

「慌て顔、ゲットです」

ピロリンという電子音がして光が消え、瞳孔が開いて再び海の底のような深いコバルトに染まったバス停を網膜が映し始める。そこに夜よりもなお青い藍の浴衣を水色の帯で纏った志緒がいた、フラッシュライトの明滅する携帯電話を両手で握って——。

「お前……」

「はい？」

暴れる息をやつと押さえて出た言葉がそれで、そしてその後が続かなかった。

自分はいったい何をしに来たのか。もともと約束にもならない一方的なアポイン



トだった。返答しなかったし、自分にそんなものを守らなくてはいけない道理はない。無論この自分勝手に馴れ馴れしい女にわざわざ会いたいという気持ちなどあるはずもない。ならば息を切らせ必死になってここまで走ってきてしまったのは、馬鹿みたいになんかに真つ暗になるまで一人で待ち続ける少女を放っておけなかったからか。

自分の齒ぎしりの音が嫌に大きく聞こえた。

「もう終わってしまいましたね」

顔を上げると、志緒は湾の対岸の方を見つめていた。

「お祭り」

二つ向こうの丘の神社に見えた祭りの明かりは、すっかり数を減らしていた。

「悪かった」という言葉を慌てて喉で飲み込んだ。それを言ってしまったら、自分の中に脆くもやっと積み上げた何かが崩れ去ってしまう。今はただ、激しい苦痛に耐えるように歯を食いしばるだけだった。

「あーあ、楽しみにしてたのになあ」

子供のようには後ろ手でぶらぶらと巾着を振り回して言う。

「でも行きたくないお祭りに無理に誘ってしまった私も悪かったですね。ごめんなさい」

それは一瞬の隙だった。彼女の意外なしおらしい態度に、心を縛る縄がほんの刹那、緩んでしまった。そして押し止めていたものが音になってしまふ。

「ごめん」

「じゃあ埋め合わせはしてくれますね？」

しまった、と思ったときはもう遅かった。一転してはしやぎ声になった志緒は、両手をぱんと叩き合わせて上目遣いに詰め寄っていた。顔が近すぎて、思わずつま先立ちになり顎を引いてしまふ。

「それとこれとはべ……」

「待っている間は大変だったなあ、バスの運転手さんには変な目で見られるし、恐い人にはナンパされるし」

丁度そのとき、遠く丘の向こうで、迷惑な街宣車のようにメタルが鳴り響いてい

るのが聞こえてきた。

「……怖い人って、あれか？」

「ええ、なんか大きい音のするスクーターでここまで来て、うるさい音楽をかけているワゴンにも何人も仲間の男の人が乗ってて。いくら断っても諦めてくれないから、スクーターを改造してもダサイですね、って言ったらすごく怒って、友達の人たちに大笑いされながら行っちゃいました」

……女という生き物はみんなこいつみたいに怖いもの知らずなのだろうか。

「でも、本当はすごくどきどきして、足が震えてたんですから」

思い出したのか、肩を抱いて俯く志緒を見て、思わずむっと唸ってしまった。

「教えてもらいながら頑張って着付けもしてきたのになあ……無駄になっちゃったし」

もう唸り続けるしかない。

「明日はお暇です？」

後で思えば、それはきつと計算し尽くされた絶妙のタイミングだった。考える間

もなく頷いてしまったのだから。

「じゃあ明日は私に一日貸してくれますね、決まり！」

志緒の顔がころりと満面の笑みに裏返っていた。こんなわずかの間に、悠理は二度もしてやられたことになる。悔やんでも後の祭りだった。

「お祭りじゃないから、安心してください。新地にいちに行きましよう、朝の九時にここで待ち合わせ。OK？ OKですね、やったあ」

はつきり頷いたわけではないのだが、背伸びしてまで息がかかりそうなほど顔を近づけられて、思わず首を引いて後ずさってしまった瞬間、決定してしまった。

「じゃあ今日は帰りますね、あんまり遅いとお祖父ちゃんに怒られちゃう」

「おい、待てよ」

背を向け、小走り駆けだしていた志緒が足を止めて振り返った。

「もう暗いから……家まで送ってやる」

志緒は一瞬惚けたように色のない顔をした後、さつきよりも嬉しそうな笑顔になった。

「大丈夫ですよ、私の家、すぐ近くだもの。知ってるでしょ？」

お辞儀するように腰を折り、悠理の顔を下から覗き込むように言った。その姿が浴衣と相まって少女らしい色気を放っているように見えて、胸の内側が跳ねるのを感じた。

「心・配・性♪ それとも……優しいのかな」

最後の言葉が冷めかけていた悠理の怒りの熱を一瞬再燃させる。顔に出たそれがおかしかったのか、志緒は口元を隠してくすくすと笑った。

「遅刻したら、食べちゃいますからね、覚悟してください」

最後に「また明日」と言い残して、志緒の後ろ姿は街灯の向こうの闇に溶けていった。白いうなじが最後まで空に浮かぶ欠けた月のように見えていた。

志緒の足音が潮騒に消えた頃、思わずふっと大きく息をついた。この数分で一週間分はカロリーを消費したような気がする。それくらい疲れた。それでも何かが片付いたわけではない。逆にやっかいごとが増えてしまったのだ。

降ってわいた不定期テストのように、明日のことを思つて憂鬱になりながら自分

も帰路につこうと振り返った刹那——全身の血管が凍り付いた。

鼻先が触れるほど目の前、そこに自分の頭を丸呑みできなほど大きな鮫サメの顔があった。

魚の幻が見えるのはいつものことだ。だが今までこんなに巨大なものが見えたこととはなかった。せいぜい片腕ぐらいの大きさのエイとか、細長いクラゲとか、その程度だ。だが、今にも食らいついてきそうなこの鮫の大きさはどうだ。槍のようにとがった鼻先から尾びれまで悠理の身長ほどもある。

今まで幻の魚に襲われたことはない。人を襲うような魚は現れなかったし、触れようとすれば逃げ出すものばかりだった。だが、もし食いつかれたりしたら——どうなるのか？

鮫は獲物を値踏みするように正面から悠理をじっと見つめている。

背筋を氷から溶け落ちた雫のような冷たいものが滑っていった。

一瞬、鮫の顔がにやりと笑ったように見えたのは気のせいだったろうか。鈍色の鮫は包丁のように鋭利な尾びれを翻し、凍り付いた悠理の首の横を掠めるように泳

ぎ通り過ぎた。

振り返った先、闇の中に鮫は消えていった。志緒の帰っていった方向へ――。



悠理の通っていた――否、通っている高校は公立とはいえ都内では指折りの進学校であり、学校の制服を着、指定鞆を肩から提げていけば近隣の中高生からの羨望の視線が少なくなる。一方で、校内では色恋が御法度というわけではないが、いつも大学進学を意識させられるため、そちらの方面に積極的なタイプは男女を問わず少数派だ。そんなところが高潔に見えるのか、周辺の学校の女生徒たちからは評判がよい。悠理のような少々鈍いタイプでも例外ではない。それでも他校生徒たちと悠理の高校の生徒たちの間で異性間交友のトラブルが少ないのは、皆少なからず「自分は安くない」という自負があるからだ。

つまり、悠理は女慣れしているわけではないが、ちよつとやさつと甘い誘いをさ

れたり言い寄られたぐらいで頭の中が桃色に変色したり意識が天まで昇ってしまふほど脳天気でもない。たとえどんな美人であろうと、突然馴れ馴れしくされたりすれば最初に生まれる感情はときめきのようなロマンスティックなものではなく、強い警戒心だ。脳内に描かれるのはラブストーリーの筋書きではなく、統計学の分布表のような精緻な利害計算図である。加えて今の悠理は、東京を追い出された一件のせいで自分で気づかなくても少なからず女性不信になっている。

よってグループ交際ならともかく、一対一のデートともなれば記念すべき人生における初体験であるというのに、悠理の気分は浮かれるどころか年に三回の進級テスト並に知性を総動員しての厳戒態勢だった。

バスの外は相も変わらず海だの林だの丘だの似たような景色が幻灯機のループレイルムのように繰り返して流れている。変化があるとすれば、今は沈んでしまった太陽の残り火が頼りなくなっていくのとともに、水墨画のようにだんだんと彫りが深くなっていくことだけだ。

都市部で散々使い回されてから売り飛ばされてきた中古のバスは、手すりに錆が



浮き、サスペンションは甘く、車内灯はバスが揺れるたびに古い掛け時計のような音を立てて明滅し、木製の床板はすっかり黒ずんでいてノスタルジックと言うより貧乏くさい。使われていない真ん中の乗車口の脇の吊革がひとつ切れてなくなっているが、このバスに限って言えば直す必要もないのだろう。実際どう見ても採算などとれておらず、夕方に走る最終バスだというのに呆れるほど閑散としていて、前から三番目の席で腰の曲がった老女が船を漕いでいる以外には、最後部座席の左右の端にそれぞれ悠理と志緒が座っているだけだ。

昨日、志緒が行き先に指定した「新地<sup>にいち</sup>」とは、最寄り駅——と言ってもバスで一時間半もかかるのだが、その周辺の新市街のことだ。もちろん地元でしか通じない呼称である。さらに言えば市街とは呼ばれていても、小さな盆地のまばらな住宅地の真ん中にぼつんと三階建てのデパートと、あとはせいぜいドラッグストアや本屋があるぐらいで、都会生活の長い悠理にとってはとても「街」と呼べる代物ではない。そのデパートとしてスーパーと呼んだ方が適当なこじんまりとしたもので、生鮮食料品以外には申し訳程度に服飾や生活雑貨が置いてあるだけだ。駅の反対側には

古い商店街があるがそれこそしなびれていて、対象年齢五十歳以上の衣類屋とか鍋でも包丁でも磨き直してくれる金物屋とか、間違っても遊びに行くところではなかった。

志緒は朝にバス停で落ち合ったときからテンションが高かった。幼い頃のことを除けば共通の話題も希薄なのによくそれだけネタがあるものだと思うほどぺちやくちやくとよくしゃべった。悠理にも時折振ってきて、意見を求めたり話題を引き出すとするのだが、悠理が気のない返事ばかり返すので話が膨らまない。するとしばらく会話が途切れる間に思案げになり、ぱっと閃いたようにまったく違う話を切り出してくる。

悠理とて意地悪をしたいわけではないのだが、今日の悠理はこのことんマイペースで馴れ馴れしい幼なじみがいったい何を考えて自分に近づいてくるのか考えることに大脳新皮質の九割方を費やしていて、残りの一割は袖が触れるだけで顔をしかめる※警戒態勢だ。何をされても嫌悪感が先に立つ。志緒に合わせて盛り上がるという気持ちにはとてもならなかった。

そんな悠理を志緒は懲りもせず引つ張り回し、時には突然手を取って走り出すこともあった。デパートの玩具コーナーで指の数ほどしかない縫いぐるみを抱えてはしゃいで見せたり、どう考えても流行に十年ばかり乗り遅れた服飾売り場で頼んでもいないのに悠理の服を選び始めたりする。

週七日のうち五日を制服で過ごし、残りの二日も量販店の無難な私服で過ごし、いたのにたいしたファッションセンスなどあるはずもないが、それでも原宿や下北沢、渋谷センター街といった流行発信地が身近な悠理には、とち狂ってもこんなところで服を買う気など起きない。大きなお世話だった。志緒にしたって今日着ているレースの入ったブラウスも、その上に羽織ったサマーニットのベストも、プリーツのスカートも、頭のセーラー帽も、この辺りではずいぶん垢抜けて見えてしまう。本人は全然気がついていないようだが、駅前を歩けば振り向く者が少なくなかった。ついでに言えば学校の制服を思い出させるそのコーディネートは悠理の苛立ちを加速させる。

二時過ぎに休憩兼遅い昼食のために一件しかない喫茶店に入ったときの悠理の中

間総括的感想は「こいつはいったい何歳だ？」であった。もちろん同い年なのは知っている。ただそれにしてもこんなつまらない場所ではしゃぎ倒す様は酷く子供っぽく見えたし、昨日一昨日のことを振り返っても年下を相手にしていたような気がする。一方で初対面同然の悠理を手玉にとった巧みさは今は卒業してしまった二つ上の先輩を思い出させた。時折はつとさせられる悠理の心中を見透かしたような言動もその印象を裏付ける。強気な当てずっぽうで数撃ったうちのいくつかに過ぎなかった気もするのではあるが。

しかしながら、昼食を終えた頃にはさすがに志緒の方もしゃべり疲れたか、それとも呆れたのか、だいぶ口数が減っていた。そうすると今度は悠理の方に罪悪感が芽吹き始めた。それは懸念からであり、つまり「もしかするとこの女は本気で自分を楽ませようと奮闘していたのではないか」という不安であった。そうだとすると自分の態度は酷く相手を落胆させたに違いないと思うのである。喫茶店を出た後、見るものもない商店街に連れ出されたのもすでに今日の残りの時間を放り捨ててしまったように受け取れたし、時折ちらちらと悠理の顔を伺い目が合うとそっぽを向

くのも恨めしく睨まれたような気がした。

そうして空の色が暖色が滲み始める頃には完全にコミュニケーションと言えるものは消え失せていて、一言も言葉を交わさなのまま今は帰りのバスに乗っている。

闇色に浸食されつつある風景とそこを泳ぐ魚たちが後ろに流れていくの見つめながら、悠理はもう何度目かわからない溜息をついた。覗き見れば、反対の端の席に座った志緒は窓枠に肘をつけて物憂げに遠くを見ている。後悔ばかりが溜まっていくのだが、何に後悔すればよいのかよくわからないので、ただもやもやしたものがけが胸を重くしていた。

二人で降りる家のそばのバス停までに海が五回見える。三回目の海が山の稜線に隠れるのを見送りながら、悠理は別れ際にどんな言葉をかけるべきかと考えていた。

「楽しかった」というのは嘘だし、嫌味にしかならないだろう。かといって「ごめん」も情けないし、的はずれな気がする。相手が「ばいばい」とか「さよなら」とか言ったのに対して無難に「ああ」とか返す様が思い浮かんで、ますます憂鬱になる。

しかし四回目の海が見えてきたとき、突然ふつと自嘲するような鼻笑いが漏れた。そもそもの悩んでもこんなにも悩んでいるのか振り返ったとき、諸々が酷く馬鹿馬鹿しく思えたからだ。馴れ馴れしくも甘えてきた相手を振り払ったのだ、早々の失望など願うところ。自分の甘さ、優しさを唾棄しようと決意したではないか。ならばこの結果は自分が変わったという証であり、勝利と言ってもいい。車内灯の反射する窓に映った自分の顔が、歯を見せてにやりと笑うのが見えた。

その、刹那だった。

突然、夜の黒い風景が窓いっぱい鈍色に変わった。それが昨日見た大きな鮫サメの横腹だとやっと気がついたのは、無機質な肌がバスの速さより遙かにゆっくりと後方に流れていき、猛禽類と同じ細い瞳孔の瞳で睨まれてからだった。

砂の城が波に浚われるように、自分の顔から血の気が引いていくのがわかった。

鮫はそんな悠理に、鋸ノコギリのような歯を剥いて見せ、そしてその巨体を翻し窓を突き破って悠理に向かつて大口を開き飛びかかった。

信号でも停留所でもないのに運転手が思わずバスを止める、それほどの悲鳴だっ

たらしい。悠理の上げた気を違えたような絶叫に、志緒はもちろん、運転手も眠りこけていた老婆も振り向き目を丸くして、最後尾の長座席の上でひっくり返った悠理を見ていた。

気を失っていたわけではないが、一瞬ホワイトアウトした意識で自分に起きたことと、自分が無事であることを理解するまでに優に十秒ほど要した。

鮫は悠理を食べなかった。驚きもんどり打って後ろに倒れた悠理の上を弾丸のようなスピードで泳ぎすぎたのだ。仰向けのまま顎を上げて鮫の向かった方向を視線で追うと、志緒が目を見張っていた。

それから情けない格好の自分に視線が集まっていることに気づき、慌てて起きあがってそっぽを向きながら頭を掻く。迷惑な乗客が寝ぼけただけだと思ったのか、運転手は呆れ顔をして前に向き直りバスをスタートさせた。

髪が逆立つほど散々頭を掻いてから横目で隣の方を見ると、志緒はもう視線を窓の外に戻して愁い顔で山並みを見つめている。午前中の彼女とは似つかないほど素っ気ない態度だった。改めて居住まいの悪さを感じて、溜息をつきながら座席に深

く座り直したとき、「あ」という呟きが耳に紛れ込んだ。

振り向くと、志緒が窓枠に張り付くように外を見ながらその脇の降車ボタンを必死に繰り返し押し押していた。だが故障しているのか、ボタンはいつまでたってもワイン色のランプを灯さない。

悠理の家のそばのバス停は次の海が見えてきてからだ。もちろん志緒の家も変わらない。そこまではまだだいぶ距離がある。このバスは最終だし、もしこんなところで降りたら徒歩で二時間近くも山あり谷ありの夜道を歩くことになるかもしれない。

しかし何事かと考える間もなく、志緒は手近なボタンを諦めて立ち上がり、ひとつ前の席に付いたボタンを押した。バスの中のランプが一斉に灯り、味気ない車内放送が次の停留所に停止する旨を伝える。バスが速度を落とす始めると、志緒は悠理に目配せのひとつもなく立ち上がって通路に出た。

「行きましょ」

「おい」という悠理の声を上書きするように言って、いつものいたずらっぽい笑



顔で振り返った志緒が悠理に手を差し出した。

この女が何を考えているのかわからないのは一昨日からずっとだが、これは飛び切りだ。この停留所は悠理の家の近所と同様、古い家屋がぼつぼつあるだけでこれといったものは何もない。せいぜい海岸の砂浜があるぐらいだが、そんなものはお互い見飽きているだろうし、それこそ家のそばの海岸でも構わないはずだ。

しかし躊躇<sup>ちゅうちよ</sup>する悠理を、志緒は手を無理矢理取って立ち上がらせようとした。

「食べちやいますよ」

「待て」と言葉にする前に、顔の半分だけで振り返った志緒が、普段からは想像も付かないような低い、抑揚のない声で言った。その顔はまるで獲物を値踏みする捕食者のような、相手の反論の一切を許さない、そんな冷たい色をしていた。普段の子供じみた表情とのギャップによるものもあつたのだろう、バスの中の気温が一気に零下まで下がったように思えて、悠理は小さく身震いし、氷のような志緒の瞳に魅入られたように瞬きひとつなく目を奪われたまま、細い手に導かれて立ち上がってしまった。

降りたバスが走り出すのを見送る間もなく、志緒は悠理の手を引いてさっさと歩き始めた。バスの通ってきた道を遡る方向に防風林に添ってしばらく歩くと、大型トラックが通れるほどの道が山の方向へぽっかりと空いていた。ただ、道と言っても下草が思い思いに生え、長いこと車も人も踏み入ったことがないのが一目でわかる。

湿り気のある草を踏み分けながら道の傾斜に添って見上げると、少し先に背の高い鉄骨の骨組みだけの建造物が見えてきた。所々壁代わりの防風シートが海風にはためくそれが何であるのか、悠理は知っている。数年前、美しい海と砂浜がありながら未だ無名のこの土地に、県の協力を得てレジャーホテルを誘致する計画があった。実際、新しい交通システムの計画が県議会を通過し、ホテルも建設開始までこぎ着けたのだが、そこまで来てから出資者であるレジャー開発会社の親会社の経営者が交代、採算が取れないと判断されて計画は中止され、後には建設途中のまま、鉄骨だけで放り出されたホテルの骨組みだけが残った。

「おこ」

近づくにつれ、月明かりだけに照らされてその荒涼たる様はつきりし始める。夜の海に沈むその異様は、遙か昔に難破し廃棄された沈没船を彷彿とさせた。

「おい！」

ホテルに踏み入る寸前まで来て、悠理は握られた手を無理矢理振り払った。志緒が足を止め、あの真冬の月のような冷たい目で振り返る。

「なんだここは！ 何の用があるってんだ！」

志緒は顔の色を微かにも変えなかった。悠理が問うているのに、まるで答えるべきは自分ではなく相手だというような、静まりかえった水面のような表情だった。

「ふざけるな、俺は帰るぞ！」

だが、踵を返すのは悠理より志緒の方が早かった。志緒は鉄筋だけのホテルの中へ駆け込むと、防風シートの向こうへ姿を消した。

カンカンと、工事用の足場を踏み叩く音が、虫の声に混ざって辺りに響いた。

こんな勝手に意味不明な奇行を繰り返す女など、放っておけばよかったのだ。捨て置いてさっさと帰ってしまったらよかった。だが、足は草に絡みとられたように動

かず、寂寥を漂わせるホテルから目を離すことが出来ない。

これだ。自分がこの女という苛々するのはこのせいだったのだ。この女といると自分がどこまでも「捨てきれない」のだと思い知らされる。どんなに振り払おうとしても、まるでそれが自分の手足のように切り離せない自分の一部だとわかってしまう。

「くそお！」

振り回した腕で鉄骨を殴ると、拳が割れて血が流れ落ちた。

月に影が差したのは、その刹那だった。

五階建てのホテルは二つの棟に別れていて、四階の渡り廊下で繋がる予定だったようだ。四階から隣の棟に向かって真横に一本だけ、鉄骨が突き出していた。その背後に丁度月が昇っていて、悠理からはまるで月に橋が架かるように見えていた。その先端に、人影が立った。おそらく両足を揃えるほどの太さもないたった一本の鉄骨の上に、まるで月から舞い降りた妖精か悪魔のように、月を背に、少女の細い肢体が浮かび上がっている。

気がつけば走り出していた。もうわけがわからなかった。心のパレットにあるあらゆる色をごちゃ混ぜにしたような混乱が頭を支配していた。ただ、足だけはこれ以上ないほど迷いなく、隙間だらけで湿気に半分朽ちている工事用の足場を踏み抜く勢いで駆け上がっていた。

上りつめ、木製の足場の途切れるところまで来たとき、闇の中に三メートルほど伸びる手の平ほどの幅の鉄骨の先に、半身を月に照らし出されて志緒が立っていた。その姿は潮風に揺れる木の枝の葉よりも頼りなく、今にも落ちてしまいそうに見える。

そこまで来てやっと自分のいる場所がどんな場所か理解する。上がりきった息を押さえようと胸を押さえ下を見れば、肩幅ほどもない木製の足場の向こうの地上は遙か遠く、落下して地面に叩きつけられる自分を想像して一瞬平衡感覚が消え失せ、意識が遠ざかりそうになった。片側しかない鉄パイプの手すりを握る右手に汗が滲んでいくのがわかった。

見渡せば格子状に組み上がった鉄骨の間を、様々な魚の群れが我が家のように泳

いでいる。ここはまさに地上の魚礁だった。

「知ってます？」

顔半分を月色に染めた志緒が微笑んでいた。その様は夜の闇のせいもか酷く妖艶だ。「群れを離れ、一度でも人間の手に触れてしまった魚は、もう群れには戻れないんです。たとえ親でも、兄弟でも、もう絶対に受け入れてくれない。匂いがね、わかるんです。群れに入れない魚は生きていけない。すぐに朽ち果てて、他の魚の餌になっちゃいます」

——この女は何を言っている？

「ちよつといいところを見せようと思っただけだった。お母さんに、お兄ちゃんに、もう子供じゃないんだって、私だって一人で獲物を捕れるんだって、見せてあげたかった。小魚の群れを追い散らして、群れからはぐれた子を追いかけ回した……追いつきた。気がついたときはお腹に砂が触れるほどの浅瀬で、私の身体は砂浜に打ち上げられた」

意味などまったくわからなかった。だから理解しようとしなかった。震える足に

必死に力を込め、手すりを握りしめ、細い鉄骨の上に乗出し、志緒に向かって手を伸ばした。

「すぐに人間が寄ってきて、私は捕まった。私は牙を剥いて抵抗したけれど、水の外は息が苦しくて、すぐに身体が重くなった。もう駄目だと思った。もう群れにも戻れない。私はここで死ぬだって、すごく悲しくて、悔しくて、それだけで心が死にそうだった」

右手の手すりを握っている限り、どうやっても志緒の身体までは手が届かない。自分の歯ぎしりの音が聞こえた。

「諦めて、私は動かなくなつた。人間が棒とか銚くわを持って囲みました。あれに打たれて、刺されてバラバラにされるんだと思つたとき」

咆吼を上げ、右手の手すりを放した。鉄筋の上を駆け、志緒の身体を抱き寄せた。

「男の子が……小さな男の子が、私の前に立っただけです。腕を広げて、私を庇うように」

志緒の声は聞こえていなかった。ただ恐怖を打ち消すためだけに裂けそうになる

ほど喉を震わせ、志緒の身体を抱えながら鉄骨の上を後ろ足に戻ろうとした。

「嘘だ、と思った。人間が私を庇うなんて、信じられなかった」

嘘だ、と思った。左の踵がついに鉄骨を踏み外して、二人の身体が大きく傾いた。

「だから、私は」

眠りについた鳥たちも、魚たちも驚き逃げ去るほどの声を上げて、悠理は右足で跳ねた。背中から足場の上に転がり、志緒の身体と足場に挟まれて息が詰まった。

「その子を殺そうとしたんです」



月も星も雲に翳った暗い夜道だった。

「怒ってます？」

悠理の後を五歩ほど遅れて志緒が付いてくる。暗いだけに足音が高く響く。雲の立ちこめた夜空は重く沈み、今にも落ちてきそうだった。



「やっぱり、怒ってますよね」

もう何度目かわからない志緒のか細い問いに、悠理の頭の中の線がついに切れた。

「あたりまえだ！ ふぎけるな！ 何のつもりだ、なんなんだお前は！ もう分けわかんねえよ！ 何がしたいんだよお前は！」

空を支えきれなくなった雲が、雨粒をぼとぼと漏らし始めた。

本当に何が何だかさっぱりわからなかった。今日のデートも、鉄骨の上での命がけの行為も、今家まで二時間もかかる夜道をとぼとぼ歩いている理由も。何よりも、自分がそんなものに付き合ってしまったことが。

「電波か、お前は！ キモインだよ！ 寄ってくるなよ！ お前なんか……！！」

そして自分の口をついて出た言葉の意味も。

「お前なんかもう死んでるくせに！」

それが、言っただけではない言葉だったと気がついたのは、目を見張った志緒の頬を涙が伝ってからだだった。いっぱい溢れた瞳から涙が零れ落ち、紙を丸めつぶしたように志緒の表情が崩れ落ちた。

堰を切ったように空から雨が溢れ出し、あつという間に二人を濡らし上げた。どこまでが涙で、どこまでが雨粒なのかわからなくなった顔を志緒が隠し、踵を返して走り去るのを悠理は呆然と見送った。胸に穴が開いたように果てのない空しさが後に残った。

振り返り、家路への道を歩いた。幾ばくも歩かないうちに、前の方から無闇に派手なヘッドライトの光がやかましいメタルと共に近づいてきた。悠理が道を空けると安っぽい音を立てる原付と悪趣味なカラーリングのワゴンが飛沫を悠理に飛ばして走り去っていった。

泥に汚れたジーンズをぼんやり見つめてから、またとぼとぼと歩き出した悠理がはつとなつて振り返ったのは、遠くからメタルに混じって少女の悲鳴が聞こえたからだ。

(怖い人にはナンパされるし……)

振り返り、雨を蹴って走り出した。

(スクーターを改造してもダサイですね、っていったらすぐ怒って……)

志緒の言葉が脳裏に甦っていた。雨に濡れた前髪が目に入るのも気にとめず、水溜まりを蹴破りながら悠理は駆けた。

原色の派手なワゴンのテールランプの横で、もみ合う男女が見えた。三人の男に囲まれ、腕を取られて今にもワゴンに連れ込まれそうになっている志緒を見たとき、悠理の頭は刹那に真っ白になった。

その瞬間は、世界中の誰よりも速かったと思った。雨粒が自分を避けていくのがわかった。男たちに駆け寄った悠理は、志緒の腕を掴む男を走り込んだ勢いのままに殴り倒した。そのまま振り返って志緒のもう一方の腕を掴むひよろつちよい男の顔面に拳を叩き込んだ。そして志緒の腕を引き寄せて自分の背後に庇ったそのとき、ワゴンの中から自分よりも頭ひとつ半は背が高い大男が出てきたのを見た。

——ああ、これは駄目だ。

頭の中のそれでも冷静だった部分の回路が、無慈悲にそんな解答を弾き出した。後ろも横も、男たちに囲まれていた。前にそびえ立った大男が振り上げたスイカほどもある拳が悠理の顔面に突き刺さり、頭の中で火花が散ったのを感じた。熱い

ものが鼻から溢れ出して、シャツをあつという間に赤く染めた。

もう逃げ道はない。勝つ術もない。その短い瞬間に悠理の導き出した答えは、志緒だけは絶対を守る、それだけだった。

志緒を引き寄せ、全身で抱いて道路脇の草むらへ押し倒した。寄ってきた男たちが次々と悠理に向かって足を振り下ろす。髪を掴まれ、靴の裏を顔面に叩き込まれる。髪の毛がぶちぶちと千切れる音がした。硬い爪先が脇腹に突き刺さる。内蔵が腹の中でひっくり返った。重い踵が背中に振り下ろされる。背骨が曲がってはならない向きに曲がるのがわかった。生まれてから一度も受けたことのないほどの苦痛を、全身で浴び続けた。それでも、志緒を抱く両腕だけは放さなかった。

氣を失ってはいなかった。無限に続くような責め苦しさをずっと感じていたから。ただ、いつ終わったのかはわからなかった。気がつけば志緒に覆い被さったまま、冷たい雨に打たれ、濁った血が志緒のブラウスを汚していた。

「……痛い、ですか」

志緒に言われて、自分が嗚咽を漏らしていることに初めて気がついた。涙が後か

ら後から溢れだして、雨よりも強く頬を浚った。

「……悔しい、ですか」

悔しかった。許せなかった。捨てきれなかった自分が。振り切れなかった甘さが。なんで自分がこんなに痛い思いをして、辛い思いをして、こんなにも苦しまなくてはいけないのか。人のことを思ったばかりに、人のことを庇ったばかりに。

「それは身体が……それとも、心が」

自分は変わらない、一生こんなハンデを背負って生きていくのかと、苦しみながら生きていくのかと、人に足蹴にされ、蔑まれて生きていくのかと、胸が、頭が、心が壊れてしまいそうだった。いつそ、今すぐ死にたいと思った。

「甘くたって……いいじゃないですか、優しくたって、いいじゃないですか」

志緒の腕が悠理の頭を包み、胸に抱き寄せた。志緒の喉からも、小さな嗚咽が聞こえた。

「世界は……あなたほど優しくなくてもいいけれど、あなたの触れたところは、こんなにも温かい」

その言葉が、悠理の中の堰を一瞬にして壊してしまった。押し止めていたものが胸から溢れ出して、悠理は雨音を消し去るほどの声を上げて泣いた。降りしきる雨の中、悠理と志緒は抱きしめあつて、ただ泣き続けた。



タオルケットから抜け出した頃には、午前の十時を大きく回って日が高くなっていた。

汗でずれた湿布や絆創膏をいくつか剥がすと、少しだけ痛みがぶり返したような気がして、昨日の夜のことが思い返された。

居間へ行くと祖母が一人でお茶を飲んでいて、悠理に「おはよう」と声をかけた。

「そうそう、ゆっちゃんか眠っている間に電話があつたよ」

「志緒から？」と悠理が問うと、祖母は目を瞬かせた。

「なにいつてんの、志緒ちゃんはいないでしょ」

怪訝な顔をした悠理に、祖母は心配そうに眉をひそめた。

「ほら、ゆっちゃんが大怪我したときの、みんなで探したじゃない。四十九日にも行ったじゃないの」

刹那の間、頭の中では古いビデオテープを逆再生したように様々な記憶のピースが飛び交った。その奥の奥にあったものが結びついたとき、悠理は床を蹴って駆けだしていた。

土道を駆け下り、防風林を抜けて道路を渡り、寂れた停留所にたどり着いた。未だ強い日差しにくっきりと庇の濃い影を落とすそこに、人の姿はなかった。

速くなった息を押さえるために一度大きく息をついてから、左側を一人分空けてベンチに腰をかけた。

そうだ、志緒は十年前に死んでいる。なぜ今の今までそんなことを忘れていたのかはわからない。だが、それなら昨日まで会っていた志緒は誰だったのか――。

わからない。それでもここにいれば、また会えそうな気がした。

昨夜の雨で蒸しかえり、微かに揺らいで見えるアスファルトを見つめながら、悠

理は待った。潮風もどこか生温く身体を包む中、悠理の意識はいつしか遅い陽炎と共に霞んでいた。

細い指が肩に触れるのを感じて目を覚ましたとき、影は短く、辺りは強い日差しと濃い湯気で白くぼやけていた。それは気が狂うほどに思えた今年の夏よりも真夏らしく、目が痛くなるような陽炎に大きく揺らぐ風景はどこか幻想的で、その中を泳ぐ魚たちの姿も相まって本当に海の中にいるように見えた。

「待っていてくれたんですか？」

背後からの声に、悠理は振り返ることなく「ああ」と素直に答えた。今さら見栄を張る意味もないと思った。

「お前は、誰だ？」

悠理の問いには答えないまま、志緒の手がゆっくりと悠理の腹の辺りまで伸びた。止めようとしたのに、まるでベンチに貼り付けられたようになぜか手足が動かなかった。そのことに動揺している間に志緒の白い手は悠理のTシャツを捲り上げて腹



を剥き出しにさせた。

「なにする」と言いかけて首で振り返ると、鼻が触れあうほど間近にいたずらっぽく微笑む志緒の顔があつて言葉を失った。志緒の指がゆつくりと悠理の腹をなぞる。波線で半円を描く、古い傷に添って。

「この傷は、どうしたんですか？」

必死に全身に力を込めて逃れようとしたのだが、首から下はまるで自分のものではなくってしまったようにびくりとも動かない。

志緒の顔がゆつくりと下がっていつて、顎を上げて見上げた悠理の喉笛を軽く歯跡をつけるように啞えた。

「答えないと……食べちやいますよ」

十年前に聞き慣れた志緒の口癖。漁師の孫であつた志緒が、機嫌を損ねるといつも口にした言葉。それが今は冗談には思えなくて、背中を冷たいものが伝った。

「十年前、お前が死んだときだ、鮫が一匹、この砂浜に打ち上げられた——」

志緒の口が先を促すように悠理の喉を食んだ。時折、生暖かい舌が喉仏に触れた。

「大人たちはお前のことでみんな気が立ってた。すぐにも鮫を殺そうとしていた。俺はそれが許せなかった。お前の死と鮫は関係ない。俺は鮫の前に立って大人たちから鮫を庇った。だけど……」

喉を咬む志緒の口に少しだけ力がこもったような気がした。

「鮫は俺の腹を咬んで俺を海の中へ引きずり込んだ。大人たちが狼狽うろたえている間に俺は海の中へ深く沈んでいって……」

「後悔、していますか？」

まるでその先はわかっていると言うように、志緒の声が割り込んだ。

「わからない……あのときは自分の信じていることをしただけだった」

「今は？」

答える言葉は出てこなかった。

「あなたの心は、十年前から溺れたままなんです、今も、この……海で」

志緒の口が喉から離れて、ほっそりとした手が後ろから悠理を抱きすくめた。そして潮騒も消えるような静かな声でゆっくりと言葉を紡ぎ始める。

「あなたは自分の中の優しさを、まるでどこかからの借り物のように感じている。そうしないと、十年前の結末を受け入れられない。優しさを持って誰かに施した結果が裏切りであるのなら、それが自分の本質だとは信じられない。信じてしまったら、自分は間違っていることになる。でも、本当に優しいあなたはそれを捨てることが出来ない」

耳元で囁く声は、胸の内から何かがこみ上げてくるほどに温かかった。ずっと閉じていた古い傷に埋まった膿が、溢れ出てくるのを目頭に感じる。

「あなたは板挟みになった。借り物と思いこんだ優しさと、辛い現実を知る記憶の間で」

胸が壊れてしまいそうなほどに締め付けられる。

「ずっと、辛かったですか。心が何度も何度も擦れて、擦り切れてしまつて、とげとげしさだけが残つてしまうほどに」

目尻から熱いものが零れ、頬を伝った。

「でも……あなたの優しさは間違ひなんかじゃない。あなたの施した温かさは、あ

あなたの負った傷は、きつと誰かにとってかけがえのないものに。あなたのその心の形は、とても愛おしい。だって」

志緒の舌が悠理の頬を流れる涙を掬い取った。

「あなたに触れた私は、こんなにも温かい」

ああ、と心の底から声が染み出した。こんな言葉が、こんな綺麗事が、こんなありふれた<sup>いたわ</sup>労りが、こんなにも待ち遠しかったなんて思いもしなかった。十年もの間、自分はただこの言葉だけを探して<sup>さまよ</sup>彷徨っていたのだとわかった。凍り付いていた心から溶けだしたものが、涙になって溢れだしていった。

自分の両肩から回された志緒の腕に<sup>すが</sup>縋るように手を添えて、ただ、泣きはらし続けた。

どれくらいそうしていたのかわからない。高く昇った日は降りることなく、いつまでも海の中のように青く揺らぐ風景を照らし続けていた。いつしか悠理の涙も涸れ、志緒の腕に添えた手を放したとき、志緒は手を後ろに組んで足音もなく悠理の前に回り込んだ。

「もう行かなくちや。時間だから」

真つ白なワンピースの裾を翻して、志緒は言った。そこに足はなかった。代わりに無機質な鈍色の魚の尾びれが日の光に閃いていた。そのことに、悠理は幾ばくの驚きも感じなかった。不思議なほどに疑問もなくその様を受け入れていた。

「また、会えるかな」

無意味だとわかっていて、それでも言葉にした。

「もう、無理だと思う」

志緒はこれ以上ないくらい魅力的な、極上の笑顔で答えた。それから悠理の首に両手を伸ばして、そこから下がるものに触れた。

「これ、返してもらっていいですか。もともと私のものだし、これがないと、眠れないの」

悠理が頷くと、首にかけてた紐は引っかかりもなく解けて、白い石が志緒の手に収まった。

「さようなら」

「ああ」

尾びれを翻し、志緒は上へ泳いでいった。ベンチから立ち上がり見上げると、周りにたくさん魚たちを従えて、志緒の姿は青く揺らぐ「空の海」へと消えていった。最後に一度だけ振り返り手を振るのが見えて、悠理も小さく手を振り返した。

それからのことはよく覚えていない。気がつくまでベンチに腰掛けたままの姿で、辺りはすっかり夕日の色に染まり、海は日を照り返して宝石を敷き詰めたように輝いていた。

何も変わらない、いつもの日常が戻ってきた。ただ、ここへ来てから——否、十年前からずっと胸の中に固く凝り固まっていた何かが、今は海辺の砂の城のように消えていて、海風が身体の内側まで浚っていくように爽やかに感じられた。

海猫ウミネコが鳴く声を追って上を仰ぐ。それでやっと、魚たちの姿がないことに気がついた。空は水面のように揺らいでいない。十二年間も見え続けていた幻が、すっかり消えてしまっていた。

ふっと、鼻を鳴らし、悠理は海に背を向けた。



「ゆっちゃん学校に行く気になったのはいいことだけど、寂しくなるねえ」

下着を広げ畳み直してバッグに詰めながら、悠理は「ああ」と適当な返事をした。もう朝から何度も繰り返されたやりとりだった。

玄関のチャイムが鳴って「おやおや」と言いながら祖母が応対しているのをよそに、悠理は帰宅準備を続けた。持ってきた服はあまり多くなかったが、下着は祖母が買い増したので結構量がある。乾かしたばかりで皺の寄ったパンツを掲げて広げたとき、その向こうから「あ」という声があった。いつの間にか縁側の向こうの軒先に誰かが立っていて、顔はパンツの影になって見えなかった。

「こ、こんにちは」

パンツをずらすと、そこにデニムのスカート姿の志緒が立っていた。

「……はい？」

思わず間の抜けた声が喉から漏れた。



「騙っていてごめんなさい」

バス停のベンチに並んで腰掛けてバスを待つ間に、少女は自分の正体を明かした。謝っている割にあまりすまなそうでないのは、別に彼女自身が志緒だとは名乗っていないかったこともあるし、あとは彼女らしい図々しさだろう。

彼女は松島水緒みずのほという。志緒の妹で、記憶にある限り志緒とは比べものにならないくらい内気で、家にこもりがちだったので、あまり思い出といえるものはない。

……人は変われば変わるものだとつくづく思う。

「初めから三日間だけの約束だったんです、お父さんに頼み込んで許してもらって」



聞けば、水緒の家族も悠理が引越した少し後に都内に越したのだという。悠理はまったく気がつかなかったが、水緒の方は通学中の悠理を何度も見かけていて、悠理が田舎に追い出されたことも知っていた。事情を知って放っておけず、わざわざこの祖父の家にまでやってきて悠理の様子を見に来たのだ。

「悠理さんがこの海で鮫を庇ったとき、私は悠理さんが許せませんでした。周りの大人たちと同じように、姉さんが死んだのは鮫のせいだって思いこんでいて」

志緒の死因は不注意からの転落による溺死だった。それでも三日三晩捜索を続けた地元の大人たちは、折良く打ち上げられた鮫に苛立ちをぶつけようとしたのだ。

「でも、ずっと後になって、あるとき正しかったのは悠理さんだけだったって思うようになったんです。そのことがずっと申し訳なくて、悠理さんを見かけるたびに胸が痛くて」

こんなしおらしいことを言っているが、その態度にはまったく媚びるようなものがない。悠理には逆にそんなところが好ましく思える。

「一昨日は途中から自分が自分じゃなくなっちゃったみたいで……すいませんでし

た」

遠くから潮騒に混じって古びたバスのエンジンの音が聞こえてきた。

「あの、携帯の番号を交換しませんか？」

互いの携帯電話に相手の番号がメモリーされると、水緒は熱帯魚エンゼルファイッシュのストラップの付いた携帯電話を大事そうに抱いて「ゲットです」と微笑んだ。

水緒がバスに乗ろうとしたとき、ふと気になって昨日は何をしていたのかと聞いてみた。

「昨日は……ずぶ濡れになったせいかな、風邪を引いて一日中寝込んでいました」

水緒のバスを見送った後、家に戻ると祖母が悠理の広げた荷物を畳んでいた。自分も仕度をつけようと胡座を掻いたとき、障子の上の神棚の赤い鳥居が目に入って、白い石を無くしたことを思い出した。それを祖母に告げると、祖母は皺を作って微笑んだ。

「あれはもともとゆっちゃんのものだから、かまいやせんよ。ゆっちゃんが鮫に咬まれたとき、お腹に残ってた鮫の歯を、志緒ちゃんのところの爺さまに磨いてもら

ったんだよ。ほら、彫り物とか大好きな人だから。ゆっちゃんが退院したら渡すつもりだったけど、すぐに東京に行ってしまったしね……どうしたね、『海坊さま』に化かされたような顔して」

よくわからないがそんな顔をしていたらしい。「かいぼうさま？」と問うと、  
「昨日までお祭りしてたでしょ、海の神様だけど、お祭りの間だけよくイタズラするんよ」

祖母は赤い鳥居の神棚を指して笑いながら言った。

祖母が手を下ろしたとき、ポケットにしまった携帯電話が鳴った。通知を見てスピーカーを手で塞いでから着信ボタンを押した。

『遅せえ！ 二十八回も発信音が……』

嘘だ。そんなに待たせていない。

とりあえず言いたいように言わせてから数日中には帰る旨を伝えると、驚いたのか数瞬間があった。

『で、武<sup>たけよし</sup>芦<sup>よし</sup>のとこの親御さんがお前に謝りたいってさ、本人も反省しているみたい

だぜ』

自分を東京から追い出した張本人の名前を聞いても、特別な感情はわかかなかった。

『……からな、一緒に大学行って彼女作って素敵な学園ライフを……おい、なんだ今の間は』

ふと相槌を忘れただけだったのだが。

『まさかお前、一人だけ田舎で燃えるようなアバンチュールを……!』

面倒くさいので通話を切った。

それにしてもなぜ自分は相槌に詰まったのだろうかと考えて、しかしながらすぐにどうでもいいやと思いついて直して携帯電話をしまった。

縁側の向こうに青い空とそれよりも青い海の境界が見える。もう魚たちも揺らぐ「空の海」も見えない。荷物をほっぽり出し、潮風をめいっぱい吸い込んで悠理は深呼吸した。

Fin.

ホオジロザメと空の海

<http://p.booklog.jp/book/68910>

著者：籾真千歳

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/tomachitose/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/68910>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/68910>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ

